

I 生活科における自律した学習者の姿

- 対象に繰り返し関わり、思いや願いを強くしていく中で豊かに表現し、活動をよりよくしようと試行錯誤する姿
- 必要に応じて場やメンバーを自ら選び、意見を共有することにより気付きをつなげ、よりよい活動にしようとする姿

II 授業デザインの実践

- 繰り返し関わり、手応えを感じながら活動を発展させていくことができるような対象の設定や出会いの場の工夫
- 思いに寄り添った展開や場で、児童が生き生きと活動できる単元づくり
- 場所・時間、メンバーを選び、必要感がもてるような振り返りの場の工夫や、気付きをつなぐ教師の意図的な声掛け

III 1年次に生成した仮説

1 成果

自然物や園児等、対象に自由なタイミングで関わり続けながら、自然や園児に対する思いや願いを強くし、遊びを発展させた姿



必要なタイミングで気の済むまで関わる事ができる身近な人やものを活動の対象とし、道徳の時間の話合いや、休み時間の散策など、教科の時間を越えて児童が対象に思いを寄せ続けられるように働きかけた。

1年「なかよしタイム part 2～ようこそ1Cなかよしランド～」では、校地内の散策から単元の学習を始め、児童は散策で発見した自然物や、学校の環境を生かして遊びをつくった。休み時間にも教師と素材集めをしたり、道徳の学習で「なかよし」についての考えを深めたりしたことで、教科の時間を越えて遊びを追究する姿が見られた。また、休み時間には広場から見えたそら組園児に話し掛け生活科での遊びについて対話をする中で、園児と一緒に楽しみたいという願いを強くし、遊びを変化させていく姿も見られた。身近な対象への気付きから活動がスタートし、友達と一緒に遊んだり、園児と対話したりする中で楽しい遊びをつくることへの考えが深まった。教科を越えて対象に関わっていくことによって、もっと楽しい活動にしようとする児童は思いを巡らせ、気付きが段々と広がったり深まったりし、粘り強く活動する姿が実現された。

自由に活動する中で直面した個別の課題を解決しようと、友達とつながりながら試行錯誤した姿



互いの課題を知り、協働して解決していきけるような児童をつなぐシートの記入や掲示物での相互評価を継続した。

単元の中で「池の水を抜く道具が不足している」「木の実でアクセサリを作りたいがうまく糸を通せない」といった課題がそれぞれの中に生まれた。友達と自然を楽しもうとベンチを作った児童は、一人で取り組むことに困難を感じ、活動から離れてしまった。しかし、振り返りのシートを読んでその活動を知っていた他の児童が「ベンチに座ることを楽しみにしている」と伝えたことで二人でのベンチ作りが再び始まった。単元内で継続した、メーターで活動の自己評価をするシートや気付きを書き込むことのできるマップの掲示、互いの活動について助言し合う話し合い等、相互評価の視点を自然にもてる環境の中で、児童は活動の全体像をつかむことができ、必要に応じてつながりながら活動を追究できたのだと考えられる。

2 課題

思いや願いに応じて自分なりの方法で試行錯誤を続ける中で、児童の遊びや、ともに楽しむことへの気付きの質の高まりが感じられた。一方で、そら組園児と遊ぶ際にも学級内で遊んだときから変容が見られない児童もいた。児童はそれまでの活動に満足しており、他者との関わりにおける価値観の変容が起きづらかったのではないかと考えられる。園児役と児童役に分かれて活動を試したり評価をしたりと、活動のなかで課題を発見できる場を計画的に設けることがより深い課題解決への没頭へとつながるのではないかと考える。

1年生活 自然の中で学びをひらく

指導者：丹 理人

研究の実践

1 単元「なかよしタイム part 2～ようこそ1Cなかよしランド～」

2 授業の実際

本単元は学校の周りがある自然を生かして遊びをつくり、つくった遊びを学級の友達や、附属幼稚園の園児と一緒に楽しんだりする中で、自然や友達との「なかよし」の価値観を更新していくことをねらいとした。

(1) ねらいの外で学びを深める

数名の男子児童は広場の池で魚釣りゲームがしたいと考えた。単元のはじめ、池には濁った水が溜まっていた。A児は、水を抜こうと私と一緒に池の栓を探した。しかし、栓を探し当てることはできなかった。水を抜く方法はないか情報を集めようとする私を横目に、A児たちはバケツで池の水を掻き出し始めた。途方もない作業に見えた私は、楽に水を抜く方法はないかと考えていた。そんな考えとは裏腹に、A児たちのバケツでの掻き出し作業は翌日も続いた。生活科の時間も休み時間も関係なく作業を続ける熱量に引き寄せられ、どんどん仲間が集まった。気付くと他のクラスの子どもも一緒に活動している。「長い針が8になったらバケツ交代ね」「ブラシは僕が片付けておくから、みんなは教室にもどっていて」と、自然と問題解決の声掛けが生まれた。6日後、池の水は完全に無くなった。私はやっと子どもたちが遊びづくりに向かうことができると思ったが、子どもたちは池の掃除を始めた。数日で汚れは無くなり、池に水を貯め始めた。水を張った後も、池には毎日多くの枯れ葉が落ちてきた。子どもたちはそれを掻き出す作業に夢中な様子で、魚釣りゲームの準備は進まなかった。園児と一緒になかよしランドで遊ぶ日が近づいていく。「早く遊びを形にしなくては」という焦りが私の中で生まれていった。

本単元が第9時まで進んだところで、道徳の時間に「なかよし」について考えた。子どもたちからは「なかよしとは、何かしてもらったら自分もお返しをする関係」という意見が出された。いつまでも池の掃除に一生懸命な子どもたちの姿を見て私は、子どもの活動がねらいから逸れていっているように感じていた。しかし、池の中で様々な活動をする中で多くの楽しさや学びを得た子どもたちは、その喜びを池に返そうと一生懸命に掃除を続けていたのではないかと。思う存分活動する中で、子どもたちの「なかよし」の価値観が変容し行動に表れたのだと、子どもの活動に対する見方が更新された。

第13時を行う日の朝、A児から「長い棒はありませんか」と聞かれた。釣り竿を作るためらしい。園児と遊ぶまでは後1時間しか残っていなかった。「棒はあるけれど、釣る魚がいないと遊べないじゃない」と聞くとA児は「魚はB君がずっと作っていたんだよ」と答えた。ばらばらに活動していた子ども同士が、遊びを成立させるために自らつながり、計画性をもって活動を進めていたことに驚かされた。

活動が予想外の展開を見せたときにすぐに修正せず、子どもの中で起きていることを見つめ、気持ちの変化をつかもうとすることが、子どもの対象への思いを醸成していくのだと気付かされた。



(2) 『もうやりたくない』から広がる学び

C児は学校の自然を感じられる公園を作りたいと考え、教室の横に牛乳パックを組み合わせたベンチを作ることにした。一人で作ることに困難を感じている様子を見て、私も一緒にベンチ作りをすることにした。段々と出来上がっていくベンチに満足げなC児であったが、日が経つごとに「私、みんなの遊びを見てくるから先生進めておいて」と私に作業を任せることが多くなった。段々と私に任せてベンチ作りから離れていったC児に「今日は頑張ってるね」と私が声を掛けると、「疲れた」「こんな生活科もうやりたくない」と、少し怒りながら困り感をあらわにしていた。ベンチ作りを一緒に進めて行く中で完成形が見え始め、私の期待感がC児の期待感を越えてしまい、活動の主導権を子どもから奪ってしまっていたのだと痛感した。何とかC児を再びやる気にさせられないかと思い、一人で活動をしていたD児に声を掛けた。D児は楕円形の葉っぱを集めており、それを組み合わせて貼り付け、花の形の飾りを作ることでできる店を開こうと計画していた。「Cさんのベンチ作り大変なんだって。一緒にやってくれない。」とお願いしてみると、「本番でお客さんがお花を作るスペースが必要だからちょうどよかった」と快く引き受けてくれた。どのような遊びが展開されているか書き込まれたマップや、毎時間書きためた振り返り等の掲示を見て、D児はC児がどのような活動をしていたのか把握していた。D児とのつながりにより、C児にとってベンチ作りは、価値ある活動へと変容した。完成したベンチに多くの友達が座る様子を見て、「次はテーブルも作ろうかな」と、C児は前向きに活動を捉えられるようになっていった。

一緒に活動を作るもう一人のクラスメイトとしての子どもと同じ視点、子どもと子どもをつなぐために全体を見る高い視点の両方をもってこそ、子ども同士の関わりを生み、学びを広げていくことができるのだと実感した。